第14回課題　解答例

Ａ

今回の動画を見て最も驚いたのは、「肌の色が違う人を見た時にどう思う？」という先生の問いに生徒の一人が一切悪びれる様子もなく「バカな人！」と言ったことだ。動画が少し昔のものだから今より人種差別が過激なのかもしれないが、授業中に先生やクラスメイトの前で堂々と肌の色が違う人々に対する暴言を言ったことに驚いた。それと同時に、社会の風潮、権力者や大人の言葉、メディアの影響力は恐ろしいと思った。幼い子供たちにそんなことを言わせてしまう社会が恐ろしい。また、この動画の授業をやろうと考え、実際に行動に移した先生の勇気に感動した。人種差別を常識だと考え、良いことであるとさえ考えている人がいるような世の中でこのような授業をするには強い意志と勇気が必要だったはずだ。しかし、このような思い切った行動をしないと生まれた時から刷り込まれてきた間違った常識は変えられないのだろうなと思った。最初は差別をされる黒人の人々の気持ちなんて分からない、どうだっていいといった様子だった生徒たちが、実際に自分たちが差別される立場を経験していくうちに、こういうことか・・・と理解していき、最後には「差別はいけないことだ」と全員が口をそろえて言うようになったことに希望を感じた。純粋な子供たちは周囲の環境や大人によって柔軟に変わることができるのだと思った。だからこそ、大人が正しいことをしなければならないのだと思った。人種差別の問題は今も世界中で起きていて、私が教員になる頃にも完全に無くなってはいないだろう。今回の動画の先生のような思い切った行動ができる自信は今の私にはまだないが、教員になるまでにこの問題について深く考え、子供たちにどう伝えるべきかという自分なりの答えを見つけ出そうと決心した。

Ｂ

青い目茶色い目の動画を見て、私は感動した。非常に心が動かされ、早くこの動画をほかの人に共有したい、この動画の話題を誰かに伝えたいと思えるほど興味深い内容だった。動画の序盤では、無垢で素直であるはずの子供たちが黒人やインディアンの人たちを平気でバカな人たちと罵っていた。彼らには悪気はないだろう。これは本人たちが自覚なく差別をしている状態といえる。そして実験では目の色で優劣をつけ、理不尽な差別をし、その後優劣の立場を逆転させ同じように差別をした。この結果優れているとされている人は劣っているとされていた人を罵って、劣っているとされた人は鎖でつながれているような気分になり、とてもいやな気分になった。また、今の社会の縮図をクラス内でうまく再現しているといえる。この結果は授業で小さいころから人種差別について学んでいるはずの人ならわかることであり、こうなることを予想することは簡単である。しかし、差別されている人の気持ちは実際に自分が両方の立場に立ったことのある人でないと分からない。そしてわからないがゆえに自分が差別しているという自覚がないのだと思う。この実験では今の社会の縮図をクラス内でうまく再現している。そして、相手の気持ちになって考えることの大切さを伝えるための手段としてこの授業の方法は非常に良い方法であり、ぜひ全世界の人に一度は受けてほしい授業だと思った。

Ｃ

私は、この動画から多くのことを学んだ。差別の残酷さ、先生の発言の影響力の大きさ、子どもは良くも悪くも純粋であること、意識は学力をも変化させること、自身で体験することはとても有益な学びであることなどである。

　この実験を行ったエリオット先生の勇気と行動力に感心した。私は動画を見ているだけで差別を受ける子どもの表情に心が痛くなった。もし今の自分に同じことをやれといわれても、差別をすることも、それを見ていることすらできない。とても芯が強く、素敵な方なのだろうと思った。エリオット先生のおかげで身をもって差別を理解できた子どもはきっと先生のように素敵な大人になるだろうと感じた。

　エリオット先生が「たった15分で別人になる」と言っていたように、条件が付いたことを理解した瞬間に子どもの表情は変わり、教室内の空気も重くなった。まるで今までの日常がなかったかのように、優位な者は弱者を馬鹿にしていた。一方で、どうすることもできない茶色い目の子どもはおそらく、自分の目の色が嫌いになり、恐怖や不安に苛まれていただろう。いじめの場合にも当てはまることだが、差がついた途端それが当たり前になる。2日目に、弱者の気持ちを知ったうえで優位に立った子どもの様子をもう少し細かく見たいと思った。気持ちがわかる分意地悪をしなくなるのか、一日目の鬱憤を晴らすように過酷さが増すのか、恐らくこの二択だろう。いじめもこうして、次のターゲットへつないでいくのかと思った。

　差別やいじめが悪いということは、人間の常識として理解しているつもりだった。しかし。このように体を張って弱者の気持ちを実感しなければ得られないものは多く、考えるよりもはやく、本能的に差別が悪いことだとわかることができる、そのような深い授業を私もいつかしてみたいと思った。

Ｄ

エリオット先生の授業風景を今回動画で見て、大胆な教育方法ではあるものの児童が体験することによって差別意識について深く理解できるものだと考えました。二日間で青い目、茶色い目のそれぞれの生徒は差別される側、行う側に立たされることで差別を短時間で体験することになる状況が作られています。

このやり方のなかで、私は短時間で行われることがより効果的にできていると考えました。その理由としてお互いの立場を体験するスパンが短い方が差別に対する負の感情がより強くでて、なぜ差別がいけないのかをしっかり考え理解することができると思うからです。

また、この授業からは差別によって人のモチベーションに変化が訪れることも分かることもできました。差別を受けることで自分の能力を下にみてしまいそれが自信にも影響して十分な力を発揮できなくなります。しかし、差別を受ける側、行う側をお互いに体験した後になるとお互いの力を尊重していこうとなることから感情がプラスに上向くことになるのではないかと考えられます。

近年のグローバル化の進歩から今後より多くの民族が日本に訪れともに過ごすようになると考えられる将来に、差別を行わせないようにするにはどうすればよいかを将来教師として子どもたちに教える立場になるのに考えなければならない課題だと思いました。

Ｅ

まず、初めにこのエリオット先生の人種差別の授業のやり方に感動した。主旨を最初に伝えずに始めたため、こどもたちも感情を入れやすかっただろう。

私が小学5年生の初めくらいの時に、私のクラスに1人の中国籍の子供が入学してきた。5年生初めの時だったので、（クラス替えの後だったので）こども達全員の机に名前が書かれているテープを貼っていた。その中国籍のこどもの机にもテープが貼られていたが、私は最初、「なんだ？この名前？」と思った。その頃は知らない漢字がたくさんあったがこれは変だ、と思っていたのだと思う。彼は中国出身のため、中国語しか話せなかったのでこちらからも話しかけることは困難であった。また、彼は日本語はもちろん話せないため、だんだん教室の端っこの方に1人で行ってしまっていた。話しかけようにもどう話せばいいか分からないので、とても困った。しかし、ある友達が学校生活でよく使う言葉を中国語でまとめてきてくれ、そこから次第に仲良くなっていった。そこから中国出身の彼は、よく自分から話すようになり、今では私の友人であり頼れる人である。

この経験から私は、人種差別はその人を殺すウイルスである、と認識している。私は差別は絶対に許さないし、たとえどんなに親しい友人だとしても差別をしていたら、それは違うと差別に気づかせてきた。それでも差別は存在し続ける。差別問題を解決することは難しいことではないと個人的に思う。

Ｆ

白人の子どもたちが普段気にせずに黒人を差別していることを体験して分からせるために先生が行った方法は有効だと感じた。授業初日、青い目の子たちは今までそう感じたことがなかったはずなのに「自分はいい子、優れている子」と認識してしまい、自然と茶色い目の子たちに差別的な行為をとるようになってしまった。一方、茶色い目の子たちは突然理不尽に差別されてしまうことにより一日の中でも時間がたつにつれ憔悴していくように見られた。二日目は全く逆の状況になっていった。見ていて胸が苦しくなった。先生がまとめとしてみんなを集めて話しているとき子どもたちは段々前の様子が戻ってきて明るくなったが、確かなものを学んだように思う。

教員になった際に差別の話はいずれ扱う場面が来るが、私もこの方法で子どもたちに理解させようと考えたが、子どもたちがどちらの立場を経験するとしても授業が発端でいじめが起きてしまうような気がするため、別の方法をとりたいと思う。

Ｇ

私はこの動画を見て、やはり人種差別はひどい行為であり、やってはいけないことだと改めて思いました。実際に小学生を目の色で差別をして差別された時の気持ちをわかってもらうというのはいいことだと思います。実際にその立場になってみないとわからないこともあると思うからです。これはいけないことだけどなぜいけないのか、そういったことを見て、自分で感じることができます。

この動画を見て、実際に差別された2日間だけでこんなにも人は変わってしまうことに驚きました。自分は偉い、偉くない、悪い子、そう思わせるだけで教室内の児童に格差ができてしまい、喧嘩も起きて、楽しくないと言って泣いてしまう子もいて、人間は怖いなと思いました。テストにもこの差別は影響して2日間同じ問題でも大きく点数が変わってしまうことにも驚きました。やはり差別されることで精神的にもすべてが傷つくのだと思いました。この動画では「エリ」をごみ箱に捨てることができるけれど、実際はこの差別を捨てることはできません。

実際現状は世界中の様々な理由で人間は差別されています。肌の色や国籍、日本ではアイヌ民族など様々です。資料にもありますが、白人警察官が黒人の男性の首を膝で地面に押し付けて殺してしまうというニュースが報道されていました。肌の色で人を差別し、殺してしまうのはおかしいと思いました。黒人だから殺していいというわけではありません。また、同じ人間でもどうして人間は差別してしまうのか疑問に思いました。自分と違うだけで差別するのはおかしいです。しかし、きっとこれからも差別はなくならないと思います。でも少しでもこの行為はいけないことだと思う人が増えればいいなと思いました。また、自分も教師になったらこのことをしっかり教えられたらいいなと思いました。

Ｈ

　私は今回この「青い目茶色い目」の動画を見て、当たり前とは怖いものだ

と感じた。私たちに目の色の違いはないが、例えば、髪の毛の長さや身長の違いなどから差別を行うとすれば、この動画の児童たちのようにあっという間に差別の世界になってしまうのだろうと感じた。

　特に一番印象に残っていることは、初日の実験で起こった昼休み中の喧嘩の話である。青い目の子が茶色い目の子に「茶色い目」といったことが原因であったが、青い目の子はただからかっているだけで軽い気持ちで言っていることがわかる。しかし茶色い目の子は「バカ」と言われているように感じ悪口だと捉えた。「青い目茶色い目」と先生が分けるまでは、目の色に注目もせずそのような呼び方もしてこなかったのに、いきなり普段の当たり前の考え方、呼び方が変わってしまっている。私はこれがとても恐ろしいことに感じた。また児童が言っていたように「青い目茶色い目」と呼ぶことは、黒人を「ニガー」と呼ぶことと同じである。また「黒人」という呼び方を多くの人が使っているが、私はその呼び方すらも差別であると思う。海外に行ったときに日本人ではなく、黄色人と言われたらどれほど不快な気持ちになるか。これらのことで、差別はいけないと全ての人がわかっていたとしても、差別のつもりなく呼び方ひとつで相手を傷つけたり不快にさせてしまったりすることがわかった。

　私が教師となれた時、よりグローバル化が進み、クラスに多くの人種の児童がいるかもしれない。そこでどうしても見た目の違いや話し方の違いなどから勝手に児童同士で差別が生まれてしまうかもしれない。しかし今回の動画の実験でもわかったように、嘘でも先生が作ったルールを正しいことだと捉え児童の関わり方は変わっていく。それを理解し、差別という概念のないルールというか常識を児童たちの当たり前にしていくことが大事であると感じた。また、人種だけでなく、男女の差別や容姿、性格面からも差別は起こりうる。そのような差別はいじめにつながる要因であると思うので、私自身の児童に対する差別のない接し方はもちろん、児童同士での差別が起きない環境づくりや対策の仕方について大学4年間で深く考えていきたい。

Ｉ

今回の講義動画を視聴して、人種差別はあってはならないことだと改めて感じた。動画で実験を行う前、子どもたちは、黒人やインディアンの人たちに偏見を持っていたように見られる。何百年前からの人種差別の歴史が、現代社会でも未だになくすことができていないのが現実なのだろうか。子どもたちはほとんど自然に、偏見をもってしまうのだろうか。今回の動画で実験を行った先生のように、教師の教育は、子どもたちに大きな影響を与える。これからは日本でも多国籍化が進むと考えられるため、子どもたちに「なぜ差別をしてはいけないのか」を的確に指導するには、私自身がまず、人種差別についてもっと詳しく学ぶ必要があると思った。もしもクラスが多国籍化した際には、皆が平等に学べる環境を作ること、むしろ、学級生活がより豊かになる環境が作れるよう努めたい。

Ｊ

　私は今回の動画を見て、率直にこういうことか、と納得しました。今まで、黒人差別を目などの様々な例に置き換えて主張している人はよく見かけましたが、実際に置き換えて実践している人は見たことがなく、また日本ではこのように過激にはせず、言葉や文章で訴えているのが多いので、とても衝撃を受けました。子どもたちには本当に心苦しく、つらいことだと思いますが、黒人差別はまさにこのように行われていたことが身をもって分かると思います。しかし、動画のようにアフターケアを万全にしないとトラウマになりかねないとも思いました。

　そして、やはり差別というのはだめだということを改めて感じました。最近アメリカで黒人差別に関する事件、デモがありましたが、いまだに根強く残っているのだと思いました。また、教育界も気を付けなければいけないと思いました。今までの日本はそこまで多くの外国人の子どもはいませんでしたが、グローバル化の波によってここ数年、多くの外国人が来日しています。そのためハーフの子どもや、ホームステイ等で来日する子どもが増えています。その子たちも日本の学校に通い、日本の子どもたちと同じ授業を受けて生活しています。その子が仮に黒人だった場合に、授業等で人種差別の問題を扱った際の対応はきちんとしなければいけないと思いました。

Ｋ

今回の動画を見て子供たちがこんなにも簡単に差別を行ってしまうことに驚いたし、差別は絶対にあってはならないものだと思います。最近では黒人に対する差別が問題視されていますが、私たち日本人も海外ではコロナによって差別の対象にされることもあるという動画を見ました。その動画ではバスやタクシーに乗ろうとしても乗車拒否されたり、街を歩いていると町の人からコロナと言われたりしていました。その動画を見て差別をされる側はもちろん嫌だし、その差別を無くすにはどうしたら良いかとても考えさせられました。また、学校内での差別は、差別されて子供たちの自分は何をやってもダメという意識を持たせてしまうため学力低下にもつながることが分かった。

Ｌ

日本には、肌の色など体で差別されることはあまりないので人種差別についてあまり考えられなかったが、今回動画を見て小さいうちから悪い大人たちや世界のせいで人種差別が根付いてしまっていることがショックだった。実際に逆の立場を経験することは、差別で傷ついている人の気持ちを学ぶことが出来ると思うのでこういう経験はとても大切だと思った。つい最近も、アメリカで白人の警察官が黒人を殺してしまうニュースを見た。まだ差別がいけないことだと思っている人が少ないのが現状だと思うから動画のような体験をして差別がどれだけひどいものか分かって欲しいと思った。また、子どもたちは先生から自分が優れているといわれたときはよい点数を取ることが分かった。教員は、子どもが出来ないことでも「できる！やれる！」と期待して接することが重要だと思った。

Ｍ

今回、初めて「青い目茶色い目」を視聴して一番に感じたことは、人はちょっとした意識によってこんなにも変わってしまうのかということです。それまでクラスみんなで仲が良く、雰囲気もとても良かったのに、青い目の子、茶色い目の子それぞれに先生が少し役割をあてがっただけで関係が壊れてしまっていたのがかなり印象的でした。

子どもたちは授業の最初で黒人やインディアンに対する差別的なことを述べていた（先生が述べさせていた）。そのときはまだ被差別側、さらには差別側の気持ちもよくわかっていなかったと思います。しかし、授業を通して身をもって経験することで差別はいけないことであるとしっかり理解できたように思います。授業の最後のほうの「えりをとっていいよ」と言われてからのえりをつけさせられていた子どもたちの笑顔、ゴミ箱に捨てるときのうれしそうな顔が今も頭に残っています。

講義資料のも載っていた、ついこの前にあった米国での黒人のジョージ・フロイドさんが警察官に暴行され、亡くなってしまったという事件があったばかりです。だれがやってもいけないことにはかわりがないのですが、警察官という、本来人々を救うような職業である人が、ということにも衝撃を受けました。

どうして瞳の色が違うだけで、皮膚の色が違うだけで、人と違う部分があるだけで、差別が起きてしまうのか、私はわかりません。時間はたくさんかかってしまうかもしれませんが、きっと歴史的な面からの意識を変えていかなければならないと思うのです。

最後に、エリオット先生のこの授業は、児童たちに身をもって差別はいけないことだと理解させ、素晴らしいものだと思いましたが、小学生の子どもたちにはつらすぎるのではないかと思いました。私はこれ以外の方法を大学生活のなかで見つけたいです。

Ｎ

私は「青い目茶色い目」を見て、教員が児童に与える影響の大きさを実感した。人種差別についての実験授業が行われるまでは差別など存在しなかった教室内に、教員が発した言葉によりたった１日で差別が生じ、以前までは気にも留めていなかったそれぞれの違いに、敏感に反応するようになっていた。さらに、動画内では目の色について意地悪をしたことで喧嘩が起こっていた。これは、教員が児童同士の人間関係にまで影響を及ぼしたといえるのではないだろうか。また、児童が優れているとされている時のテストの点数は最高で、劣っているとされている時の点数は最低を示していた。これもまた、教員の評価が児童の学習の結果を左右していることを表している。このように、教員は児童に対して良くも悪くも大きな影響力を与えている。私が教員になったら、自身の影響力を有効に活用していきたい。

　また、ただ差別が良くないと伝えるのではなく、相手の立場に立ち身をもって体験することで、様々な見解を知ることができるのだと感じた。すべての授業において身を持って体験することは難しいかもしれないが、児童自身が体験できる機会を大切にしていきたいと思う。また、相手の立場に立って物事を考えることで、世界はより良くなるのではないだろうか。相手の気持ちを理解することで、人々は助け合ったり配慮し合ったりすることができると思う。常に誰かのためを思って行動することは難しいかもしれないが、そのような考え方を少しでも持った大人に育ってほしいとあらためて実感した。

　私が教員になったら、差別における今までの歴史や背景をふまえて、差別をしてはいけない理由を児童が考えを広げやすいように伝えていきたい。さらに、国際化に伴いクラス内に外国籍の児童が在籍していることも多いだろう。その際には、すべてのクラスメートに対し平等な教育機会を保障できるように、実質的な平等を目指して試行錯誤していきたい。

Ｏ

 動画を見て、驚きました。実験授業前には、肌の色が違う人たちのことをバカだと思っているなど差別意識があったり、実験授業内には、差別されていない子は優越感にひたり、差別されている子をからかったりしていたのが、実験授業を終えて子どもたちはみな差別をすることはどういうことなのか、差別をされた側はどのような気持ちなのかを理解し、「差別はいけない」と認識することができていました。実験授業中、差別される側を体験していた子どもは、先生に差別的な発言をされるたびに悲しい表情を浮かべていました。きっと、そのような悲しい気持ちになるたびに、差別とはこういうものなのだと考えさせられていたと思います。子どもに「差別はいけない」と理解させるのに、エリオット先生の実験授業がとても効果的でした。確かに小学3年生の子どもに、言葉で「差別はいけない」と説明しても、多くの子どもが理解できないと思います。先生の言葉をまず理解できず、「どういうこと？」「何でダメなの？」や「みんなしてるじゃん」と思うはずです。言葉で説明ではなく、子ども自身に体験させる、差別される側の気持ちを体験させることによって、小学3年生の子どもも自分の体験を通して、なぜ差別はいけないのかをしっかりと理解することができるのだと思います。

　また子どもに簡単なテストをさせた時、褒めていた日は子どもの意欲が感じられ、時間も速かったのに対し、褒めないむしろ「バカ」や「ダメだね」という言葉を受けていた日は子どものやる気はあまり感じられず、時間も遅くなっていました。教育心理学の授業で、学習効果に影響する要因に、教師の期待があることを習いました。また、ピグマリオン効果という教師が生徒の行動や成績について期待を抱くと、生徒の行動や成績が教師の期待に近づくことを表した実験があり、特に低学年の年代では顕著に結果が現れるということも学びました。私は実験授業の簡単なテストのシーンで、これらのことを思い出しました。教師も、子どもによって期待したり期待しなかったり(褒めたり褒めなかったり)という差別をすることなく、子どもに対してみなに期待をする、つまりみな平等に扱うことが大切であると、改めてこの動画で学ぶことができました。

　肌の色、目の色の違い、身体の違いなどによって、差別することは絶対にしてはいけないことです。私も教師になった時には、クラス全体で差別はいけないことであると理解させ、「みんな違ってみんないい」という教育ができるようにしたいです。

Ｐ

エリオット先生の行う授業はとても実用的なものだと思った。子どもは自分自身の行動を深く考えておらず、無意識に行っていることが多いように感じる。子どもたちに「差別」について伝えるのに、この方法はとても有効なものだと思った。最初に先生が「肌の色が違う人を見た時どう思う？」という質問をしたとき子どもたちは「バカな人」と答えたり、「どのような扱いを受けますか？」と質問した時「仲間外れにされる」などと口々に発言していたが、これはその分、子どもたちにとって身近にかつそれが当たり前のこととして認識されているんだなと思った。その後先生が子供たちに青い目と茶色い目で上下関係を作っていたが、それを聞いている子供たちはとても困惑しているように見えた。その後の活動の様子を見ても上下関係の上側の子たちは楽しそうに活動していたが、下の子は楽しそうではなかった。どっちの色の目の子がどっちになっても反応は同じように見えた。先生が言った「茶色い目の子の方が偉いんだよ」という言葉一つで、今まで同じ立場にいた子どもたち同士に亀裂が入っていくのが、映像を見ているだけでも伝わってきた。ただ、先生が最後に言った「目の色や肌の色で人を区別していいですか？」という問いかけに誰もが「違う、よくない」と言えたのは、お互いがお互い（上下関係の上と下両方）の立場に実際に立って考えられたからだと思う。これは私も当たり前のように行っているが、人の気持ちを考えるとき自分に置き換えて考えるという動作を実際に行ったものだと思う。アメリカでは生まれてから自然と黒人差別という固定概念が身に付けられているように感じたが、この考え方を自分の身を通して経験することは大きく子ども自身の考え方を変化させると思う。教育を行う中でこの問題を子どもに伝えることはとても難しいが、最後に子どもたち全員が皆平等だと感じた時に見せた笑顔はとても大切なものだと思った。この問題についてまずは大人自身が正しい知識を持って子どもに向き合っていくことが大切だと感じた。

Ｑ

　「茶色い目、青い目」を視聴して、まず考えたことは、今までの私の認識ではこの問題を理解するのに不十分だったということだ。

　今まで私は黒人のデモ活動をニュースで見る際に、「何十年もよくやるなぁ」なんて、他人事のようにとても軽く受け止め、そして聞き流していた。この問題に対して文字通り命がけで立ち向かい、涙を流し、叫ぶことを、死者を出すまで行い続けることが、私には理解できなかったのだ。

　黒人差別とは、雇用や就学などの人生の転機において、自分に何ら関係のないハンデを背負わされる程度のものだと、私は本気で思っていた。こんなこともちろん許されるべきことではないと思った。けれども、思うだけだった。差別を受けている人の気持ちになってみようなんて考えたためしはなかった。

　実際に動画で見たのは、差別を受け、行動に様々な制約を受けるだけではない異様な光景だった。その光景とは被差別者たちの能力が差別を受ける前と違って各段に落ちた光景だ。

突然始まった差別により、無条件に優位性を与えられた差別者たちは、能力のパフォーマンスが各段に上がり、被差別者には全く逆の様子がみられた。たったの二日間でこの有様なのに、日常的にこの扱いを受けている人は一体どれだけのハンデを背負っているだろうか。

「黒人より白人のほうが優れている」なんて言葉をたまに古めの本で見かけるが、これを考えるとこの言葉はあながち間違っていないのかもしれない。

白人は差別で強い自己肯定感を得て、自尊心を満たされて勉学や仕事などで高次の欲求を満たして社会に貢献していくのに対し、黒人は、差別によって欲求段階の低いところを大人になっても延々とさまよい、日銭を稼ぐことに終始する。これが幾世代にもわたって続けられれば、その差はいずれ明確な統計といった形で現れ、それがまた差別を助長する。

こんな負のスパイラルを、自分の子や孫の世代にも受け継がないために、黒人たちはあそこで命を懸けて戦っていたと考えれば、納得がいった。

Ｒ

平等、差別という言葉は、最近も話題になったと思います。白人の警察官が黒人の男性を過度に押さえつけ、死亡させてしまったという出来事もありました。私はこのニュースを見たときから、自分自身で「差別」というものについて考えてみました。今回の授業課題である動画も、とても考えさせられることがあり、あっという間に視聴し終わったという感じでした。動画を視聴して思ったことは、なぜ差別というものは無くならないのだろうということです。モヤモヤした感情が胸の中に突っかかりました。

　人種差別にとどまらず、差別は数多く存在し、いろいろな場面で現れます。動画を視聴し、差別をしてきた人は、「もし、自分が逆の立場になって差別をされたら」というような想像力が足りないと思いました。これを考えた時、友達にいじわるばかりする生徒に「自分がされたら嫌でしょ？」と問いただしていた先生を思い出しました。いじめと差別は少し違う話かもしれませんが、では、なぜこの2つは無くならないのか。真っ先に思い浮かんだ理由は、一度自分が有利な立場や状況を味わってしまうと、それを失いたくないという思いがあるからだと思いました。それがどんなに不公平で最低なことだとわかっていても、その特権を失いたくないという、人間の本能であり欲求であるものがあるからだと思いました。

　また、差別が無くならない原因としては、多数派が正義であり少数派が邪道という概念があるからだと思いました。周りと違うということを個性や特徴というように、プラスに捉えることができない。これは日本にもあります。人と違うことで多くの人に迷惑をかけたり、いけないことをしているのなら理解できるが、なぜそうではないのに個性や特徴を嫌うのか。その理由にも疑問を持ちます。自然にこの思想が、多くの人々に埋め込まれてしまっているから、差別を受けている人は抵抗をしても差別は無くならないのかなとも考えました。

　正直、この差別という問題はとても大きいテーマであり、決定的な根拠を考えるのは難しかったです。ただ、差別というものを肯定することは一切ありません。簡単には無くならない残酷なことだからこそ、私たちはこの問題を考え続けなければならないと思います。教員は、たくさんの生徒と出会います。一人一人の児童と真摯な気持ちで接し、みんなが等しく平等に成長できる環境を提供できるようになりたいと思いました。